

國學院大學學術情報リポジトリ

Book review : Shouhei Miyazaki,
Jyoryu-nikibungaku-ronsyu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Fukuya, Toshiyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000284

〔書評〕

宮崎莊平著 『女流日記文学論輯』

福家俊幸

いわゆる女流日記文学作品の研究を志す者で、本書の著者である宮崎莊平氏の論文を参看したことがない者は皆無である。平安時代の女流日記文学を主要な研究対象とする研究者でも、例えば『蜻蛉日記』の論文はたくさんあるが、『紫式部日記』については一本もないなど、多少のこぼれがあるのが常であり、それが研究者の側の個性であり、対象とする作品との相性というものであろうが、著者は中古の仮名日記だけに限らず中世の日記文学や周辺作品にいたるまで、個々の作品とジャンル

的特性を縦横に論じ、そのいずれもが驚くべきことに必読の研究論文となっている。著者の論考が持つ説得性の高さは、資料の博搜と明晰な論理構築とともに、そうした視野の広さ、すなわち仮名日記というジャンルの進展を歴史的展開の中で跡付けた、巨視的な視点に拠るように思われるが、そのことはあらためて述べるとして、本題の『女流日記文学論輯』について述べていきたい。

すでに著者は女流日記を中心に据えるものに限っても以下の

五冊を上梓している。いずれも学界において高く評価されてきた著作である。

平安女流日記文学の研究 笠間書院 一九七二年

平安女流日記文学の研究 続編 笠間書院 一九八〇年

女房日記の論理と構造 笠間書院 一九九六年

王朝女流日記文学の形象 おうふう 二〇〇三年

王朝女流文学論攷―物語と日記― 新典社 二〇一〇年

これらの著作も一冊ごとに収載された論考が有機的に連関し、完結した世界を形成しているが、この『女流日記文学論輯』はこれらの五冊から選抜された論文に、二〇一〇年以降に執筆された論文も加えて、新たに再構成され体系づけられた、総べーじ九二三にも及ぶ文字通りの大著なのである。

本書のあとがきで、著者は次のように述べている。「今回は物語文学にまで範囲を拡げずに、原点に立ち戻り、女流日記文学一本に絞り込み、拙いながらわが来し方の足跡を辿り、回顧と反省を加えておこうとの思いである。」

この大著は著者積年の女流日記研究の集大成としての意義を持つ。本書は一九六〇年代後半から現在にいたる論考を掲載し

ている。著者は女流日記文学研究の質量ともっとも盛んであった時代からその研究を領導してきたのであり、本書はそうした足跡を記しとどめている。従って、本書を読むことは、現代の女流日記文学研究の進展を確認することと同義であり、その到達点を考える上でも、本書刊行の持つ意義はまことに重いと云えるだろう。本来であれば、その目次を掲出して、読者の便宜に供するべきであろうが、目次すら大部ゆえに、それだけで紙幅の大半を費やしてしまう。

そこで簡単に全体の構成に沿って、本書の威容を紹介する。本書は全体を六部に分かち、それぞれ、

I 総合論……一〜六節

II 作品論……一〜八節

III 時間論・表現論……一〜五節

IV 女房日記論……一〜六節

V 中世女流日記論……一〜五節

VI 関連論……一〜七節

という形で構成されている。全三十七編の論考が連関しつづいて冊を形成している様相はまさに壯観である。

「I 総合論」では、女流日記文学作品に共通する要素を帰納法的に抽出し、「日記文学とは何か」という本質的命題を解明していく。ともすれば日記文学研究に限らず、現代の中古文学研究は微視的な視点に傾斜し、包括的な論議に乏しいように思われるが、著者の巨視的な視点と作品への目配りの確かさ、諸資料を取り扱う際の公正な姿勢は際立っている。そのバランスの良さ、明晰さはともすれば情緒的な議論に向かいがちな日記文学研究の中で特筆すべきものと思われる。

著者は女流日記文学の本質に「悲嘆の表出」があると述べる。具体的な事例を挙げて、積み重ねられる論述は強い説得力を持つている。一方で女流日記の記録の問題を扱った論考もあり、この問題は本書の中でも一章に分かれたれ、重要な位置を占める。「IV 女房日記論」の諸論考に繋がっていく。

女流日記文学の読者の問題が中心課題として扱われているのも、本章の大きな特徴である。著者は女流日記の読者意識の希薄さを述べ、「読者と称するのはふさわしくなく、限定的に用いて、共感者・理解者あるいは同情者と呼ぶのが実情になんかっていると思う」と説く。女流日記の読者は、本質的な課題であるが、研究者間の揺れも大きいのが現状である。今後、本書で示された視点を参看しつつ、さらに研究者間で論議が重ねられ

るべきであろう。

「II 作品論」では平安時代の五つの女流日記作品——『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』『讃岐典侍日記』——をめぐる作品論が並ぶ。いずれも初出当時から広く参照されてきた作品論であり、作品形成に関わる中心的な課題が追究されている。五つの作品すべてが論じられていることから冒頭に述べたように、著者の広範な学問領域と秀抜なバランス感覚がうかがえよう。研究姿勢、論述の方向性も作品ごとによれることなく、一貫している。本章に『成尋阿闍梨母集』をめぐる論考が取められていることも注目すべきであろう。著者は早くからこの作品を日記文学として評価し、文学的意義を認定しているが、そのことは現在広く認められていると言ってよいだろう（氏の業績に『成尋阿闍梨母集』の優れた注釈書（講談社学術文庫）があることも言うまでもない）。

「III 時間論・表現論」も、女流日記の本質に関わる問題が取り扱われている。日記文学を構成する重大な要素に暦日があるが、本章では物語文学のそれと対比しつつ、女流日記独自の暦日の位相を探り当てている。特に閏月をめぐる個々の作品の解析と、そこに投影された意識から、女流日記文学の暦日の選択に、作者の生活感覚の反映を読み取るのは卓見であろう。

「IV女房日記論」には「女房日記」を中核に据えた論考が収められている。著者の言う「女房日記」とは、女房が記した日記という一般的な意味ではない。著者の定義は以下のとおりである。「主として後宮近侍の女房によつて筆録される、主人と主家の繁栄を象徴する賀儀等の慶祝事の記録であり、しかもそれは、単なる行事記録にとどまらず、盛況の雰囲気を目撃した状況記録である。さらに付言すれば、主人と主家の意を体する後宮近侍の女房が、それに奉ずる立場からその繁栄の様相を記録的に現出するものである。」

このような定義は『河海抄』にその逸文が伝わる『太后御記』や歌合日記などから還元されたもので、さらに女房日記は『紫式部日記』や『枕草子』の源流に位置付けられるものとした。著者の女房日記の定義は、女房の記録の核となるものを帰納法的に抽出したもので、女流日記文学の展開を押しさえていく上で、的確にして有効な視座であったと思われる。特に女房と記録との関係、さらにその記録の慶祝的性格を明確化したことは、ともすれば個々の作品が分断され、影響関係が見出しにくいとされた女流日記作品を系統立てて位置付ける上で極めて有効な基軸であったろう。それだけではなく、記録的な性格が強いとされる中世の女流日記の諸作品と中古のそれとを繋ぐ視座をも与

えるものであった。今後、記録する女房の実態やそれと深く関わるはずの女房日記の始原性、さらには女房日記と女流日記文学との差異、どのような点が女流日記文学への跳躍へと繋がったかなど、すでに本書でも問題化して論じられてはいるが、さらに考究すべき重要な課題として後進へと開示されていよう。

「V中世女流日記論」にも、著者の広範な研究領域がうかがえ、何よりもその記録性に正当な評価が与えられている。「中世女流日記の性格が、女房日記に照らしてはじめて鮮明さを増す」という言説は強い説得力を持つように思われる。

「VI関連論」は、比較的近時の論考を中心に、講演記録の文体を改めたものなども含む。著者には講談社学術文庫『紫式部日記』という重要な注釈書があるが、この章では『紫式部日記』が大きな柱を形成している。紫式部の重厄と『源氏物語』、さらには『日記』叙述との関係を論じるなど、傾聴すべき指摘が多い。著者と宮内庁書陵部蔵黒川家本『紫式部日記』との出会いと調査の経緯が回想されていることもまことに興味深く、研究史の上でも貴重な証言である。一九六七年一月刊行の「文学」に掲載された著者の論文「黒川家旧蔵本『紫日記』について」によつて、それまでその真価が知られていなかった当該本が現在の主要注釈書のいずれもが拠る最善本として評価される

ことになった。そのような重大な学術的発見を行つた著者が数十年の年を経て、講談社学術文庫『紫式部日記』を上梓するにいたるのも、後進にとつてまことにありがたい機縁であつたと言えよう。

いささか私の関心に引き寄せた紹介、論評となつてしまったことをお詫びしたい。すでに述べてきたように、本書は女流日記文学研究上の重要な課題がすべて取り上げられ追究された、総合的かつ正統的な研究書であり、その成果をいかに受け継ぎ、発展させるかが、後進に委ねられた喫緊の課題である。本書を讀みつつ、何度も私の胸に去来したのは「研究の王道」ということばであつた。日記文学研究の王道をゆく本書を羅針盤に、私も遙か後方の脇道を歩む後進として、自らの研究の現在地を探る作業を不断に重ねてゆくことになるだろう。

(A5判、九二三頁、新典社、二〇一五年一〇月発行、定価二六八〇〇円＋税)